

聖書:第一列王記14章1～20節

説教:みこころにかなうことがあったから

はじめに

イスラエルが北と南に分裂してしたことで、北の人々に大きな課題が発生しました。神殿が建っているエルサレムは南の国にあったため、北の人々は行けなくなり、礼拝する場を失ってしまったのです。そのため北王国イスラエルの王となったヤロブアムは二つの金の子牛を造らせ、その一つをベテルという町に築いた祭壇に置き、そこで人々が礼拝できるようにしました。表向きは問題が解決です。しかし神の目からご覧になれば大きな罪です。すぐに神の人が南王国から遣わされ、ベテルの祭壇で香をたいていたヤロブアムに厳しいさばきのことばが告げられました。

前回は、その神の人がベテルからユダに帰る途上で起きた出来事を見ました。あらかじめ神から、パンも食べず、水も飲まず、もと来た道を通って帰ってはならないと告げられていたのにもかかわらず、あるひとりの預言者にだまされ、もと来た道を引き返し、パンを食べ、水を飲んでしまったために、獅子に襲われ殺されてしまいます。このことについては分からないことがたくさんありますが、でも神の人が死んだことで、主が語られたことは必ず成就することと、主に背く者にはかならずさばきがあることをベテルの人々が悟って大きな衝撃を受けたのは確かでした。

それほどのことがあったのですから、ヤロブアムが悔い改めて罪から立ち返ってもよさそうです。しかし今日のところ見ておわかりのとおり、彼は何も変わってない。神はこれをご覧になり、どのようなことをされたのか。ともに見てまいります。

1 ヤロブアム

1) 息子が病気になった

あるときヤロブアムの息子アビヤが重い病気になったので、ヤロブアムは妻に変装させ、土産を持たせて預言者アヒヤのところに行かせ、息子がこの先どうなるのか聞いてもらうことを考えつきます。なぜ変装させるのか、不思議に思うかもしれませんが。日本でも少し前までそうでしたが、イスラエルには家の名を絶やさないという伝統があります。万が一にも跡継ぎが死ぬということになればお家取り潰しです。そうでなくても、周りには、少しでもすきがあればヤロブアムを倒して王になろうとする者たちが目を光らせて狙っています。そんなわけ

で、王の息子が病気であることが外に漏れては大変なことになる。それで妻を変装させて、周りに気付かれないようにさせました。

あるいはもう一つの可能性があります。アヒヤにヤロブアムの妻であることがわかれば、自分の犯した罪のことで厳しいことを言われるだろう。そのようなやましさがあったのかも知れません。

2) 「十部族をあなたに与える」

では、なぜ預言者アヒヤのところに向かうのか。話は、ヤロブアムが未だ若くしてソロモンの忠実な部下として働いていたときにさかのぼります。彼の前にあるとき預言者アヒヤが現れ、こう告げたのです。「見よ。わたしはソロモンの手から王国を引き裂き、十部族をあなたに与える。」(11章31節)

ヤロブアムはこれに力を得て、ソロモンを裏切り、政権を奪おうと企てるのですが、失敗しエジプトに亡命せざるを得なくなる。でも、やがてソロモンが死ぬと、北の人々はヤロブアムをエジプトから呼び寄せ、北の王として迎えたわけです。こうして預言者アヒヤが語ったことが成就します。

ヤロブアムはこのことを忘れていません。自分が王となることを預言したアヒヤなのだから、もしかして息子が助かるようなことばを告げてくれるかもしれない。そのような希望的観測があったのでしょうか。

2 アヒヤ

1) ダビデは主に聞き従った

続いて場面は預言者アヒヤの家に移ります。アヒヤは高齢のため目は不自由になっておりましたが、主の御声を聞く霊的な洞察力は衰えていません。ヤロブアムの妻がやって来たことを見抜き、このように語ります。7節後半から8節前半。「わたしは民の中からあなたを高く上げ、わたしの民イスラエルを治める君主とし、ダビデの家から王国を引き裂いて、あなたに与えた。」

なぜダビデの話が出て来るのか。実は、ヤロブアムがイスラエルの王となるためには、一つの条件がついていたからです。アヒヤは11章38節でこう語っていた。「もし、わたしが命じるすべてのことにあなたが聞き従い、わたしの道に歩み、わたしのしもべダビデが行ったように、わたしの掟と命令を守って、わたしの目にかなうことを行うなら、

わたしはあなたとともにいて、わたしがダビデのために建てたように、確かな家をあなたのために建て、イスラエルをあなたに与える。」

主の目にかなうことをするようにと言われた彼でしたが、実際はどうであったか。

2) あなたは主を捨て去った

9節。「ところがあなたは、これまでのだれよりも悪いことをした。行って自分のためにほかの神々や鋳物の像を造り、わたしの怒りを引き起こし、わたしをあなたのうしろに捨て去った。」

その結果、非常に激しいことば遣いでヤロブアムの家が絶えてしまうのだと言われてしまいます。

ここを読んで、神は非常に厳しい方だと思いませんか。でも振り返ってみると、神はこれまで何度も警告していたのです。わざわざ神の人を遣わして警告し、奇蹟というしるしも見せ、ヤロブアムのしていることに心を痛める人たちをベテルの町にも起こさせ、何度も悔い改めの機会をヤロブアムに与えていた。それでも頑なに拒んでいたのです。息子が病気になったときも、まだ悔い改めるチャンスは残されていたのに、それでも救いの御手を拒みました。それで、こう言われてしまいます。12節。「さあ、家に帰りなさい。あなたの足が町に入るとき、その子は死にます。」

神が厳しいのではなく、神が差し出してくれた救いの御手を拒み続けたヤロブアムが厳しい。そのように言うべきかもしれません。

3 神、主

1) 主のみこころにかなう者が死ぬ

「神は必ず罪をさばく。」今日の箇所からこのような教訓を引き出すことができるでしょう。でもそれですべてなのか。一箇所引かかるところがあるのです。それは13節です。「全イスラエルがその子のために悼み悲しんで葬るでしょう。ヤロブアムの家の者で墓に葬られるのは、彼だけです。ヤロブアムの家の中で、彼だけに、イスラエルの神、主のみこころにかなうことがあったからです。」

いったいこれはどのようなことでしょうか。ヤロブアムの息子アビヤは「主のみこころにかなうことがあった」と高く評価されています。であれば、さばかれる理由はなにもありません。ところが、ここで死ぬのは罪を犯した張本人であるヤロブアムではなく、彼の息子のアビヤの方であった。これはどういうことか。なぜ正しい者が死ななければならないのでしょうか。

前回はそうでした。神の人はヤロブアムに対し、いのちがけで厳しいさばきのことばを語りました。神から語られたことは絶対に守らなければならないと心に定め、パンを食べず水も飲まず、もと来た道を帰ろうとしなかった。それなのに、ベテルの年老いた預言者にだまされ、主のことばに背くことになり、そのために獅子に襲われ、亡骸が道ばたに放り出されるという不名誉な死に方をしてしまいました。

神の人もアビヤも、このふたりはなぜ死ななければならないのか。神は正しい方であり、公平な方であると言われているのに、これでは不公平ではないですか。正しい者がかえってひどい目にあって死ぬ。そのようなことを許す神であるなら、まっぴらごめんと言いたくなります。

2) イスラエルは悼み悲しんだ

もちろんそんなはずはない。ではこの箇所をどのように理解すべきなのか。最後にそのことを考えていきます。ヒントは13節にあると思いますのでもう一度読みます。「全イスラエルがその子のために悼み悲しんで葬るでしょう。ヤロブアムの家の者で墓に葬られるのは、彼だけです。ヤロブアムの家の中で、彼だけに、イスラエルの神、主のみこころにかなうことがあったからです。」

普通、皇太子が亡くなれば、王の命令によって半ば強制的に国民は喪に服することになるでしょう。ところがアビヤが死んだときはまったく違う。全イスラエルが自ら進んで悼み悲しんでいった。なぜでしょう。

人々はわかっていたのではないのでしょうか。アビヤは王である父とは違って主のみこころにかなう人であった。父親は偶像を造り、何度も神から警告を受けながら、罪から離れようとしな。でもアビヤは主の前で父親の罪のことで心を痛めていた。人々は心の中でそんなアビヤに期待をかけていたのだらうと思います。であるならばなお一層疑問になります。なぜアビヤは死ななければならないのか。

3) 神の救いの方法

アビヤのことから、神がどのように罪人を救おうとされるのか、二つのことを教えられると思います。

一つ目。神は罪をさばく方です。これには例外はありません。でもそれをしようとするなら、私たち全員が罪人ですからすべてがさばかれることになる。残る者はひとりもいません。しかし主のみ

こころは、私たちが滅ぼすことではない。私たちが全員救いたいと願っている。さばくことと救うこと。これを両方同時に成し遂げようとするのは、普通は絶対にできない。神は、この矛盾をどのようにして解決するのでしょうか。驚くべきことに、神は正しい方をさばくという方法をとられました。正しい者がほかの人の罪の身代わりとなって死ぬ。主イエス・キリストの十字架がまさにそうだったのです。十字架で正しい者が死ぬことによって、さばきと救いの両方を同時に成し遂げていただきました。アビヤのことを通して、十字架が預言されているように思います。それが一つ目です。

二つ目。主のみこころにかなっていたアビヤが死んだことで何が起きたか。イスラエルは彼の死を悼み悲しみました。なぜですか。人々はアビヤに期待をかけていた。彼ならば神の正しさに立ち返ることができるかも知れない。そんな期待をかけていたアビヤは死んでしまった。だから悼み悲しみます。神はそれを知らないのか。いいえ。主はそれをご覧になっています。イエスはこう言われました。「義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。」（マタイの福音書5章6節）

アビヤが死んだことによって、義に飢え渴く者たち、救い主を待ち望む人たちが起こされました。ですから、アビヤは決して父親の犠牲となって無駄に死んだのではない。アビヤの死を通して、やがてイスラエルに救いがもたらされる道が備えられた。

これは私たちへの励ましともなります。私たちはこの世の罪を前にして、あるいは自分のうちにある罪に対して嘆き悲しみ無力で何もできないと思っていました。ところがそうではない。罪を悲しむことこそが主の救いをもたらす大きな働きとなっていくのです。

このようにしてまで私たちが救おうとされる主の御名をあがめます。